2019 年 12 月

ICOM-CC ICOM international council of museums – committee for conservation

ICOM KYOTO 2019

ICOM KYOTO 2019
ポストカンファレンス in 東北

実施報告

報告：Kristiane STRÆTKVERN（ICOM-CC＜ICOM 保存国際委員会＞委員長）
Kate SEYMOUR （ICOM-CC＜ICOM 保存国際委員会＞委員）

作成・編集：東日本大震災被災文化財等に関わる諸施設の視察および交流事業実行委員会

文化庁 Agency for Cultural Affairs, Government of Japan 平成 31 年度文化庁地域の博物館を中核とした文化クラスター形成事業

ICOM KYOTO 2019
ポストカンファレンスツアー　IN 東北
2019 年 9 月 8 日（日）～9 月 11 日（水）

主催：ICOM-CC（ICOM 保存国際委員会
ICOM 京都大会 2019 組織委員会
東日本大震災被災文化財等に関わる諸施設の視察および交流事業実行委員会

企画：Kristiane STRÆTKVERN（ICOM-CC＜ICOM 保存国際委員会＞委員長
榊 玲子（たばこと塩の博物館　副館長）

監修：神庭 信幸（東京国立博物館名誉館員）
半田 昌之（公益財団法人日本博物館協会 専務理事）

参加者：19 名

通訳：南部ゆり

スケジュール：

第 1 日目（9 月 8 日）： 京都～（東京）～新白河～郡山
視察先：福島県文化財センター白河館“まほろん”
第 2 日目（9 月 9 日）：郡山～多賀城～気仙沼
視察先：東北歴史博物館、リアス・アーク美術館
第 3 日目（9 月 10 日）：気仙沼～陸前高田～盛岡
視察先：陸前高田市立博物館（博物館仮施設）
第 4 日目（9 月 11 日）：盛岡～東京（解散）
視察先：岩手県立博物館

「ポストカンファレンスツアー in 東北」には、イタリア、ブラジル、ノルウェー、デンマーク、スウェーデン、英国、オランダ、ドイツ、オマーンそして日本から 19 名の参加があった。参加者は文化財保存・修復の専門家だけでなく、博物館でさまざまな仕事に従事している人々であり、中には夫婦あるいは家族ぐるみでの参加もあった。専門分野は多様であっても、日本における文化財保護について多大な関心を持っている点で共通しているメンバーでもあった。ICOM 日本委員会や博物館関係者が参加し、指揮をとってくれたことにより、移動がスムースに進み、温かい歓迎モードの中で、高いレベルの情報と専門性の高い内容を共有することができた。

第 1 日目：9 月 8 日（日）：京都→白河→郡山

福島県文化財センター白河館　“まほろん”

ツアー一行は、鵜澤義孝副館長、本間宏学芸課長、中尾真梨子副主任学芸員をはじめ、スタッフの方々からの歓迎を受けた後、まず本間氏より、2011 年 3 月 11 日に起きた出来事についてのプレゼンテーションを受けた。本間氏からは、沿岸を襲った津波や決壊したダムからの土石流によって、地震による被害がいかに拡大していったか、また、近くの原子力発電所の事故により放射能汚染が引き起こされたために、汚染地域からようやく文化財を救出できたのは、現地作業のための安全対策が確定した 1 年半後であったこと、その間、放射能汚染された地域の文化財は、処置されることなく、放置されるままだったことなどが説明された。

救出された文化財は、使用されていない女子高校内に設置された一時的な仮倉庫に運び込まれ、さらなる解決策を待つことになった。そして、2 年後に、福島県文化財センター白河館の敷地内にプレハブの建物が建設された。この収蔵庫は、紫外線カット照明、岩綿吸音板の天井、ブナ材の床、キュアライト製の壁面パネルという仕様となっている。特に、天井・床・壁面のパネルは、２層のアルミ箔を挿みこむ不透湿合板という特別仕様である。また、湿度は 60%を超えないよう室内空調は除湿機により調整され、虫害に対するモニタリングも実施されている。さらに放射線量は常に計測され、収納棚は耐震構造となっている。（立入制限区域の設定による）住民の地域外への移住は、専門的なスキルが失われることを意味し、博物館スタッフの増強は、これらの文化財が適切に取り扱われるためにも必要なことである。

壊れやすい文化財の保管に対して、実用的かつ最良の方法を見つけるには長い時間がかかるということは明らかである。ここに収蔵されている資料がいつか元の場所に戻されることを願って、入念な登録システムが用いられている。他機関との協議が必要であることは明らかであり、また、この収蔵施設のために取られた様々な解決策が、今回のツアーで訪問した他の施設でも同じように取られていることがわかった

常設の収蔵庫の見学も行われ、ラックや棚に使用されている素材、庫内のモニタリングシステム、あるいは地震対策についての説明を受けた。

博物館の展示室内には、津波により被害を受けた被災文化財の管理者としての博物館の役割について説明をするコーナーも設けられている。小さいながらも魅力的なこの博物館は、印象的な野外展示でも（参加者から）非常に喜ばれていた。

<u>参加者のコメント</u>：

「博物館スタッフによる歓待も、今回の訪問のために用意されたプログラムも、感動的で心温まるものでした。本間学芸課長には、2011 年 3 月の地震と津波の影響全般について、さらには、対応にかかった時間や次々に発生する実務レベルの問題などについて分かりやすく解説していただきました。また、福島原子力発電所の事故以降行われている文化財の放射線量のモニタリングをはじめ、文化財のレスキュー活動の複雑さについても説明いただきました。日本政府が震災発生の 20 日後にはすでに文化財レスキューの活動計画の実施を決めていたことを知り、驚きました」

「個人的には、ここでの注目すべき点は放射能問題ではないかと考えます（というのも、ツアーで訪れた中で、この問題を課題としてあげていたのはここだけでしたから）」

「どちらかと言えば小規模な施設が、文化財の救出作業によって生じる大きな課題に取り組んでいるのに驚かされました。この博物館にもともと備えられていた耐震構造の収蔵庫を見学できたのは興味深い体験でした。（レスキュー活動のために建てられた）仮収蔵庫は耐震性が低いように見え、残念な気がしました」

「再現模型を含め郷土史を扱うこの魅力的な博物館が持つ地域的な役割の中で、2011 年の震災と文化財レスキュー活動について詳しく紹介されていました。このことは、この震災が持つ歴史的広がりを再認識させるものとして心に響きました」
「屋内外の展示と解説の両方が魅力的で、分かりやすく、退屈することがありませんでした。多くの人に訪れてもらいたい、すばらしい場所です」

第２日目：９月９日（月）午前：郡山→多賀城

東北歴史博物館

東北歴史博物館の千葉正利学芸部長、小谷竜介主任研究員、そして保存科学の専門家である芳賀文絵学芸員に出迎えられた一行は、小谷氏による、同博物館の沿革について簡単な説明を受けた。

東北歴史博物館は 1989 年に設立され、管理、学芸、企画の 3 部門で総勢 32 名の職員がいる。約 7 万点（写真資料を除く）の資料を所蔵しており、年間約 15 万人の来館がある。資料はカテゴリーごとに保管されており、各収蔵庫はそれぞれ適切な温度と湿度に保たれている。

資料搬入口には、資料点検、写真撮影、開梱のための部屋が設けられ、収蔵庫の壁には正負圧調整のための空間があり、収蔵庫エリアの床と壁にはレッドシダーが使用されている。また資料は 2 つの部屋で酸化エチレンガスを使って燻蒸処理が施され、紙資料、陶磁器、浸水被害を受けた木資料の保存処理を行うための設備も十分に整えられていた。

小谷氏からは、2011 年の地震発生後に同博物館が果たした役割についてのレクチャーも受けた。小谷氏の説明によると、博物館の建物は耐震構造になっており、建物のガラス部分も無傷であったが、建物そのものはわずかながら沈下し、地震発生後は博物館へのアクセスが危険な状態となっていたということである。しかし、建物へのアクセスの安全が確認されると、博物館のスタッフは津波で被災した地域からの文化財レスキュー活動に取り掛かったという。

地震の直後に発生した停電は、3 月 15 日まで続き、水道の供給は 3 月 31 日までなかったという。空調設備が回復したのは 4 月 5 日のことで、電話回線は 4 月 15 日まで不通であった。大きな余震が発生し、電力・水道の途絶が 4 月 18 日まで続いたことが被害をさらに拡大させた。本館にはさらなる被害はなかったが、棚の上にあったものは再び大きく動いてしまった。

すべての資料は安全な場所に移され、空調がない状態の 1 カ月が過ぎた後、RH（相対湿度）は安定した状態に回復した。より急を要する措置が取られている間、比較的被害の少なかった部屋は閉鎖されたままとされた。本館の収蔵施設は建物の中心部分にあるため、安定した状態であった。この収蔵施設まわりには緩衝帯が設けられていることから、復旧作業が行われている間も、常に RH は安定した状態にあった。博物館の設計は良く考えられたものであった。

津波の被害は広範囲に及び、海岸から 15km 内陸にまで達していた。東北歴史博物館のスタッフは、約 10 の施設からの文化財レスキューに参加した。救出され、同館に運び込まれた文化財は、約 1,568 箱、50 万点に達した。既存の収蔵庫を空にすることで、救出された資料の一時的な保管場所が館内に確保され、博物館の所蔵資料は他の場所に移されることとなった。なお、これらの一時保管場所では、湿度が最大の問題であった。

紙資料を中心とした脱酸処理、金属資料の防錆処理といった、緊急かつ応急的な処理が施され、資料は脱酸状態で容器入れて保管された。作業は保存を専門とする学芸員によって行われたが、学芸員以外のスタッフも技術指導を受けることになった。低予算を意識した処置作業であったと言える。

スタッフは、紙資料の処置に関するセミナーを開催したり、それについての印刷物も発行した。また、他の政府関係機関などとの連携した取り組みも進められた。

ディスカッションの後、一行は収蔵庫施設、燻蒸室、保存科学部門に案内された。緊急時にも高度な専門基準が維持され、苦難と喪失の最中にあっても団結心が失われることがなかったのは明らかである。地震と津波の発生以前に策定されていた災害管理計画が実行に移された。東北歴史博物館のチームは、非専門家やボランティアを有効活用し、被災文化財の処理方法についてもかなり細かな手順を定めてきた。このような大量の作業に追わながらも、博物館としての日常業務や収蔵資料の管理が続けられているのは、博物館のスタッフが彼らの仕事に誇りを持ち、同じような状況に置かれた人々に対し助言する立場にあるからである、ということは明らかである。

<u>参加者のコメント</u>：

「この比較的新しい（耐震構造の）建物は、設備が十分に整っているように見えました。保存に対する彼らの方針についての説明や、レッドシダー材が使われた収蔵庫の見学は興味深かったです。電気、水道、ガス、空調が２度にわたって停止したという話にも身につまされるものがありました。インフラはあって当たり前のものであり、私達はそれに完全に頼りきっていますから。停電時（および、その後、湿度と温度が一定に保たれていることが確認されるまで）に収蔵庫を閉鎖したままにすることにした職員の皆さんの決断からも、収蔵庫の緩衝能力の重要性がよく分かります」

「震災後の文化財レスキューに対する同博物館の対応――自館のコレクションを移動させ、他の10の文化施設からの被災資料を受け入れるためのスペースを確保する、というもの――は見事でした。また、非学術系の職員を指揮して、資料の救出作業や、従来と違う業務を遂行させた保存部門の学芸員の管理能力も注目に値します」

「東北歴史博物館の脱酸処理、真空凍結乾燥、記録のための装置、資料の取り扱いや梱包、そして熟練した職員の皆さんの様子を拝見して、とても感心しました。同博物館とその職員の皆さんが2011年に被害を受けた博物館や諸施設の再建計画にも携わっていると聞き、安心しています」

「総じていえば、保存専門学芸員の皆さんが大変な根気強さと誠意をもって、紙資料をはじめとする被災文化財の修復に当たられたことに心打たれました。その作業は非常に感情を揺さぶるものであったに違いありませんから」

「この博物館の訪問を終えて、キーワードを３つあげるとすれば、コミュニケーション、コラボレーション、被災文化財の未来の創造ではないでしょうか」

第２日目：９月９日（月）午後：多賀城→気仙沼

リアス・アーク美術館

ツアー一行は佐藤光一館長による歓迎を受けた後、山内宏泰副館長／学芸員の案内で常設展示室を見学した。展示室は、山内学芸員と２人の同僚が津波の数日後、数週間後、数カ月後に撮影した写真で構成されていた。また、津波に襲われた地域から救出された資料（消毒済み）が部屋中に積まれ、展示されていた。写真には、それを撮影した時の学芸員自身の思いを綴った文章が添えられており、心に強く訴えかけるものとなっていた。美術館側にはこれらの情報を教育目的に使用して欲しいという意図があり、写真も（美術館の）許可を得れば複製することができるようになっている。

そこには、自然は人智を越えたものであるという政治的メッセージが込められていた。自然はコントロールすることができないものであるがゆえ、人間は考え方を改める必要があるとういうわけだ。歴史史料や絵画資料には、このような大地震が決して一生に１度の出来事ではなく、30～

40 年ごとに繰り返されていることが示されており、震災発生当時の報道にあったような未曽有の災害でもなければ、異例でも、類例のない出来事でもなかったことがわかるのである。
気仙沼地域に特化したこの美術館の２階には、地元の人が日々の仕事に用いる歴史・民俗資料が常設展示されており、情報量が豊かで、よく構成され展示となっていた。

参加者のコメント：

「被災物、そして地震と津波の直後に取られた数々の写真の展示には、全員が言葉を失いました。山内宏泰学芸員から、詳しい解説と、展示の背後にある論拠を聞いて、感情がさらに揺さぶられました。写真の沈黙の裏側には明確なメッセージが隠されています。それは、このような災害は以前にも起こったことであり、そしてこれからも起こるのだということ。人類は自然に抗えないのであり、今こそそれを念頭に置いて社会を構築し、住処を定めなければならないということです」

「2011 年の震災と、津波による災害の歴史の両方についての常設（!）展示は、私にとってドキュメンタリー（写真）と感情（3Dオブジェクト）の両面で重要な意味を持つものでした」

「展示の背後にある哲学は、津波の歴史をその悲劇と共に明らかにする、というものです。このような歴史は日本ではかならずしも最初に想起されるわけではありません。また、地球物理学的な側面に対応する方策としての都市計画についても。。。私にとってこの美術館の訪問は、社会で論議されている博物館の潜在的役割について明確な例を示してくれるものでした。この特殊な事例において、一体どのようにして個人的な観点が組織的な観点へと発展していったのだろう？」

「明らかに私達は、最も大きな被害を受けた地域に足を踏み入れようとしていました。そこでは博物館の職員の親族の命や家が失われました。そのような状況にあっても、地元や日本の他の地域から多くの人がボランティアで文化財の救出作業に当たったのです」

「同美術館の展示は強烈で、忘れ難い印象を与えるものでした。人類は歴史から学んで初めて生き延びることができるのです――事実や出来事を見て見ぬふりをするのではなく、正面から立ち向かい、責任のある行動を取らなければなりません」

「津波後の写真に特化した常設展示はとても印象的でインパクトのあるものでした。津波によって流された物を有形の記録として使用しているのが大変効果的で、災害の深刻さを想起させるものとなっていました」

第 3 日目：9 月 10 日（火）：気仙沼→陸前高田→盛岡

陸前高田市立博物館（博物館仮施設）

津波被害者のための市営の追悼施設に到着する前に、次の訪問先である陸前高田市立博物館の熊谷賢学芸員がバスに同乗してくれた。追悼施設は、津波の被害が最も甚大だった地域を見下ろすかさ上げされた中心市街地にある。この地域では、巨大防潮堤の建設を含む復興計画が進められており、住宅地は人工的にかさ上げされた土地に再建されている。展望台からは、わずかに残った建物を見ることができたが、現在、この地域には建物や樹木がほとんどなく、ここでの体験は胸を痛めるものであった。熊谷氏は、当事者の視点から、津波が襲ってきた当日の様子を語ってくれた。市役所の屋上に避難し、津波が目の前に迫ってくるのを見ていた様子を、忌憚なく話してくれたが、彼の家、職場、生活の全てが津波によって破壊されたことを聞いた瞬間は、強く心を揺り動かされる瞬間でもあった。

追悼施設近くの情報センターには、津波とそれによる被害、そして復興に関する資料が展示されていた。地元の高校が所有する小型船も展示されていたが、この船は、津波発生の 2 年後、米国・カリフォルニア州の海岸に漂着し、その後、クレセントシティの地元高校生の手により清掃され、日本への帰還を果たしたものであった。

一行は再びバスに乗り、山腹にある陸前高田市立博物館の仮収蔵施設へと向った(陸前高田市矢作町)。博物館の資料は現在、小学校の校舎に収蔵されているが、この小学校は津波発生時の翌月には閉校となる予定であった。一行は市立博物館のスタッフに出迎えられ、収蔵庫および保存処理

のための作業室として使用できるように整備された施設を見学した。大久保裕明館長による歓迎の挨拶に続き、（熊谷氏から）津波と当日の出来事についての詳しい説明があった。

仮設施設は津波発生から 25 日後に開設され、資料が運び込まれるようになった。これらは、陸前高田市立博物館や陸前高田市立海と貝のミュージアムなど、4 つの博物館から第 1 次レスキューで救出された資料である。

合わせて 46 万点近くの資料が救出された一方で、約 10 万点の資料が失われた。レスキューの次の段階は、救出された文化財の安定化処理であった。安定化処理は、まず、津波による浸水で付着した汚泥や塩分を洗い落とすことから始まった。資料洗浄には施設の近くの川の水も使われたが、洗浄で汚れた水は、近隣住民の許可を得た上で、細心の注意を払いながら川に流すようにされた。

紙資料は除菌処理され、海水による、塩分を取り除く、脱塩処理が施される。そして、残存する塩分の量を計測した上で、乾燥されることになる。また、紙の破損個所は和紙による裏打ちも施されている。8 年程で、半数近くの資料の処理が完了した。安定化処理が施されるまでは、資料は冷凍保存されたままであるが、塗膜のある漆工品、水に浸漬すると流失してしまうインク書きの資料、油画などの処置は困難なものとなっている。

安定化処理の後は、資料の登録となる。津波が発生した時は、ちょうど手書きラベルからラミネートラベルへの移行時期であり、残ったラミネート加工されたラベルのほとんどはその情報が失われないですんだ。あらゆるデジタル記録が保存された博物館のコンピュータは失われたが、前館長の手元に発災の 2 年前の資料リストが残っていた。今では、デジタルデータの保存の一部には、クラウドストレージが使われている。

大量の貝類標本のラベルが失われたため、現在、標本の再分類とラベリングが行われている。プラスチック製ラベルの一部は残っているものの、海水で汚染された状態にある。資料は、いわば、箱の中に箱を作るような形で、体育館の中に設けられた特注の仮設施設で保管されている。これらの資料は、元あった場所の近くに現在建設中の新しい博物館がオープンするまで、ここで保管されることになっている。また、建設工事は 2021 年 3 月に完了する予定であるが、陸前高田市では、新しい博物館がオープンした後も、この収蔵施設は残し、ここでの活動も維持し続ける意向である。

<u>参加者のコメント</u>：

「火曜の午前中の体験は衝撃的でした。崩壊した建物、一本だけ残った松の木（奇跡の一本松）、そして新しく建てられたコンクリートの防潮堤といった風景の中をバスで進む中、熊谷氏が津波のこと、その夜をどう過ごしたか、そしてその後の日々と出来事について語ってくれました。公務員としての彼の仕事は、自分自身のことは二の次にして、彼が所属する博物館の安全を確保し、資料を救出すること、そして公共のために尽くすことであったと言います。忘れることのできない話です」

「バスの車中（神庭氏が解説をしてくれました）と追悼施設のどちらもとても印象的でした。津波の恐ろしさがありありと伝わってきました。ですが、何よりも感動的だったのは、元小学校で聞いた体験談です。心温まる歓迎レセプション（または情報交換会!）によって、この日が特別な1日となりました」

「記憶に残っている具体的な事柄としては、地元の人々の支援（今も行われているのでしょうか?）、津波で流失したデータベース（バックアップは取られていませんでした）と幸運にも保存されていた登録データのハードコピー、しっかりとした取り組み方（それぞれに決まった課題があるように見えました）などがあります」

「強く心に残る博物館と作業施設でした。『失われた』船が、震災の２年後にアメリカのカリフォルニアで高校生達によって発見されたことは、単に震災という側面だけでなく、人間または個人レベルへの影響の大きさを示しているようで、大きなインパクトを与えました。山の中にある施設を訪問したことは特別な体験でした。単に場所がすばらしかっただけでなく、地域全体のために行っている取り組みや仕事を知ることができました」

「私にとって、遠くに１本だけある枯れかけた木を目にし、陸前高田市立博物館があった場所の追悼施設の前に足を止めた時は、まるで地面に飲み込まれるかのようでもあり、ツアーのハイライトの１つでした。大久保館長の話によると、博物館の建物は津波によって 10m 浸水したそうです。救出された市資料は山の中の小学校に設置された仮施設に保管され続けることになっているようです。話に聞いていたとおり、博物館の保存・修復の専門家たちは新しい手法を試しているようです。そこには、生命は続いていくのだ、という見えないメッセージが隠されているように感じられました」

「博物館のチームはとても熱心に取り組み、自分達の成し遂げたことに誇りを持っていました。彼らは震災から得られた教訓と経験を、未来そして世界にプラスの効果をもたらすものに変えようと取り組んでいます」

情報交換会

心を打たれる視察を終え、夕方盛岡市に到着。そこで一行は、公益財団法人岩手県文化振興事業団と岩手岩手県立博物館のご厚意で催された「歓迎レセプション」または「情報交換会」に招かれ、楽しい時を過ごした。懇親会では、伝統的な日本の音楽の演奏に続き、津波の様子を記録したビデオが上映された。ツアー参加者が、この時までに体験してきたポストカンファレンスツアーについての印象や意見を発表しあった後は、より現代的な方法で音楽を楽しむことになった。主催者とゲストが一緒になってのカラオケで。このイベントもまたよい思い出となっており、心より感謝している。

第 4 日目：9 月 11 日（水）盛岡→東京

岩手県立博物館

はじめに、岩手県立博物館の高橋廣至館長より博物館についての紹介があった。同博物館は設立 40 周年目を迎えようとしており、歴史、考古学、文化（民俗）の各部門の資料を所蔵しているとのことである。

館長からの短い講話の後、上席専門学芸員・赤沼英男氏の案内によって、保存処理施設を見学した。保存処理作業の大部分がそこで行われているとのことで、スタッフは、津波で被災した博物館から救出された昆虫標本の洗浄作業を行なっていた。昆虫が入ったトレイには汚泥水が溜まっていたが、大量の水を使うと標本が傷ついてしまう可能性があるため、水の量を加減して慎重に汚れを落とす必要があり、脚などの脆い部分を避けながら、アルコールと水の溶液で洗浄しているとのことであった。

地震と津波の発生から 8 年半が経過したが、同博物館の保存部門は、日本博物館協会などの支援を受けながら作業を続けている。チームのメンバーは 2 人から 17 人に増え、その内 7～9 人が紙資料の保存・修復に携わっている。保存・修復作業は、（陸前高田市の）小学校の仮施設と同博物館の保存処理室の両方で行われているが、別館として 2 階建ての保存・修復専用施設も設置されている。この外付け施設を利用することで、資料の二次汚染を減らすことができる。これまでに、4 つの施設から救出された約 50 万点のうち、約半数の資料の修復が完了したということである。

保存作業室で行われる紙資料に対する安定化処理としては、中性の水溶液による脱酸処理、たわみや皺の均し作業、脆弱な紙の裏打ち/裏張り、製紙用パルプによる欠損部分の充填、再製本などであった。

（こうした保存処置においては）時間が重要な意味を持つことになる。資料はまず、汚れを洗い落とすことで安定化が図られた。しかし、その後の処置はしばしば遅れがちになり、最初の洗浄処理から数年が経つと、資料は黄ばみ始めており、臭気も放つようになってきている。これは恐らく、汚泥水に含まれる魚油が原因と思われるが、この魚油やタンパク質は、津波の海水中の魚が死んだことで出てきたものである。水溶性インキが使われた紙資料の洗浄は難題であり、これらの資料をどう処置するかについてはまだ回答が出ていない状態である。その他処置が困難な資料としては、漆芸品、油絵、水彩画、皮革資料などがある。特に、写真の資料の保存・修復は大変難しいと考えられている。学術的な調査が進められ、同時に得られた知識の拡散が求められている。というのも、こうした専門知識の共有は、同じような状況にある人たちの助けになるに違い無いからである。

参加者のコメント：

「あらゆる種類の資料（紙、書籍、金属、陶磁器）に対し、高度な処置と配慮が施されていることに感銘を受けました。何よりの収穫は、中庭にある真空凍結乾燥装置を見学できたことでした」

「ツアーの最後を飾るにふさわしい場所でした。これまですでに多くのことを見聞きしていましたが、今回、さらに踏み込んだやりとりが行えました。そしてもちろん、ここでも、いくつかの試みや、資料の主材質に応じた異なる保存・修復処置を見せてもらいました。この４日間、とても温かい歓迎を受けてきた後に、例えば、西洋絵画の処置の問題などで、今後多少なりとも我々が貢献できることがあるかもしれないと分かったことは、慰めとなりました」

「記憶に残っている課題として、大型の冷蔵庫（代替策は見つかったのでしょうか?）、本のページを一枚一枚サンドイッチ方式で挟んでいっていること（1 冊丸ごとで見て、どの程度の効果があるのでしょう?）、手順や保存・修復作業の紹介の仕方がすでに出来上がったものの様に見えたこと（定期的に見学者が訪れているのでしょうか? また、このような紹介は、どのような層をターゲットとし、何を目的として行っているのでしょう?）があります」

「最後に、素晴らしい美術品を所蔵する、（地震や津波の）被害を受けていない博物館を訪れ、日本の歴史を学ぶことができたのは嬉しかったです。限られた時間であったにもかかわらず、博物館の若い女性職員が一生懸命に説明してくれました」

ツアーを終えてのコメント

「とても充実した、忘れられない経験になりました。最近では、旅の話を求められたら、このツアーのことをまず最初に話すようにしています」

「初日に聞いた最初の言葉が今も心に残っています。それは、人間が自然を征服することはできない、というものです。自然は、我々が共に生き、尊重し、適応することを学ぶべき対象です。博物館の世界において、私達はお互いからいかに適応し準備するかということを学び、対応し、そして実行するための有用な方法を共有する必要があります。今回訪問した博物館は、互いに助け合いながら、危機に瀕し不安定な状態にある資料に対処しているという最良の見本を示してくれ、――さらには、『社会のための社会的な拠点』としての役目をいかにして実践できるのかについて、さまざまな方法で示してくれました。とても感動的で、ためになる体験でした」

「個人的にも、仕事面でも、ツアーの結果にはとても満足しています。ツアーで出会った全ての人が、丁寧かつ親身な態度で迎えてくれました。多くの人が、業務時間外も含め、多くの時間を割いて、私達に会ってくれました。重要な文化財を個人と施設の両方のレベルで保存していこうという、前向きな姿勢と意志に感銘を受けました。津波後のさまざまなコレクションの状況を考えると、多くの人が希望をなくすのも無理ないことです。絶望的とも思える状況でした。そして今でさえ、全ての資料の修復・保存には多くの作業が必要です。その意味でも、今回出会った皆さんの前向きな姿勢には感銘を受けました」

「今回訪問した全ての施設で、自分達が取り組んでいる仕事・作業について、分かりやすく説明してくれました。いずれの施設でも、手に入る資金・資源を利用して、被災した資料の修復・保存にあたっていました。少ない資金・資源で保存・修復作業をしっかりと行っている人々には、特に感銘を受けました。津波によって、保存の専門家たちは課題を突きつけられ、これまで経験したことのない難問に直面することとなりました。今回、彼らがどうやって新たな方法を見つけ出そうとし、それらをどのように試しているのかを知ることができました。成功したことも、失敗したことも、全て包み隠さず話してくれました」

「もっと詳しく知りたいと思ったことがいくつかありました。修復と保存には入念な計画が必要です。今回のツアーを振り返ったとき、計画についてもっと知りたかったと感じました。津波発生前に何らかの計画はあったのか。それらの計画に従うことは可能だったのか。津波発生後の作業の計画と組織化はどのようなものだったのか。将来の危機に向けた備えはどうなっているのか――といったことです」

「2011 年に日本が体験したような場面に世界が直面する機会が、今後さらに増えるであろうと考えます。日本の、特に東北地方の博物館や文化的・歴史的施設が、震災の経験から得た知識を共有しようとしてくれていることに感謝します。また、私達が脆弱な存在であり、私達のコレクションを大切に扱わなければならないということに気づかせてくれたことにも感謝しています。今回のツアーにお力添えいただいた全ての方に心よりお礼申し上げます」

ポストカンファレンスツアー後のフォローアップについて

Kristiane STRÆTKVERN

ツアーの過程で、日本では、どのような素材や資料の処置が可能であったのか、どのような種類の資料がいまだ問題に直面しているのか、また、どのような面で適切な安定化処置の計画が調査され、開発される必要があるのか、ということが分かっていった。

これは、ICOM-CC（ICOM 保存国際委員会）のネットワークを使えば、日本で進められている優れた取り組みを支援することができる分野である。ICOM-CC は保存に関する専門家達の広大なネットワークを有しており、活発な意見交換がなされている。また ICOM-CC は、同委員会のメンバーと問題を共有する義務があり、その共有は各ワーキンググループのニュースレターあるいはグループミーティングにおいてなされている。また、日本の保存の専門家たちと ICOM-CC のワーキンググループとの間で、対象を絞ったワークショップを共同開催する可能性についても探っていくことが必要であろう。

ICOM-CC ツアーの参加者の中には、我々のコミュニケーションプラットフォーム（ニュースレターや Facebook）や ICOM-CC 大会を通して、ICOM-CC メンバーのネットワーク全体に対し、今回学んだことを共有する者もいるであろう。

災害後の保存・修復についての課題は、地震、火災、洪水、また／あるいは、異常汚染というように、その災害がなんであれ、あらゆる国境を越えた課題である。この課題にいかにしてより幅広く取組んでいくべきか、――たとえば、2020 年に開催される ICOM-CC 大会の本会議とするなど、ICOM-CC の委員会でも議論する予定である。さらに、素材や資料の受けた損害の種類によって、速やかに助言を与えることのできる専門家たちのリストを作成することも極めて重要である。災害発生時には時間が重要な意味を持ち、災害が起こった際には、ICOM-CC としては、効率的に対応できるように努めなければならない。最後に、経験と有益な助言は、記録・整理され、資料の将来的な予防的管理に役立てられるようにしなければならない。

日本の保存専門家たちへは、被災資料に対する保存・修復処置の中で、課題となっている処置等に関して、2020 年の ICOM-CC 北京大会のポスター発表において議論できるように、ポスター発表内容の概要を提出するよう提言すべきである。（提出期限：2019 年 11 月 15 日）。

日本の文化と東北地方で進められている優れた取り組みを知るための私達の旅は、始まったばかりである。このツアーで育まれた絆が、対話と協力を通して、地理的境界を越えて続いていくことを心より願っている。

ICOM-CC は、本ツアーの開催に対する日本国文化庁の支援に深く感謝申し上げる次第である。また、本ツアーの開催にあたり、ツアーの立案・計画から助言・監修など、あらゆる面でサポートしてくれた日本の博物館関係者に厚く御礼申し上げる。

ポストカンファレンスツアー　その後への期待

神庭　信幸

2019 年 10 月 8 日

何かが生み出された場所、不幸な出来事が起こった場所など、その現地に赴き、その場に立つことの大切さを私自身理解しているつもりでいるが、今回のツアーはそのことの重要性を目の前で再認識する機会となった。同時に、災害発生時からの時間の経過が、初めてその地を訪れる人びとの感情に影響を及ぼすものではないこともよく理解できた。人びとから災害の記憶が風化していくことはあっても、災害の事実は劣化しない。ツアー参加者は災害発生当時の文化財レスキューの状況説明、博物館展示や安定化処理の見学を通じて、今も懸命に作業を続ける専門家たちと交流を深め、災害の大きさとその後の文化財保全への取り組みについて明確なイメージをもつことが出来たと思う。

このような体験を ICOM-CC 会員やその他の博物館関係者に共有してもらい、増加する自然災害に対する対策の重要性を深く認識し、実践できるようなノウハウを獲得できる国際的なワークショップ、例えば陸前高田国際ワークショップ、を具体的に構想できるかを検討してみたい。また、新たに設置が決まった博物館防災国際委員会との連携事業についても考える必要がある。

今回のツアーの経験から、日本の保存関係者が積極的に ICOM-CC に関わり、日本がこれまでに蓄積してきた保存や防災に関する経験やノウハウを国際社会に提供できるような環境づくりを、これまで以上に強く促していきたいと考えるようになった。ICOM-CC との連携強化を通じた国際社会への貢献と、有益な情報獲得による日本の保存分野の一層の成長に期待したい。